

日本文化部会 I

【概要】

寺内由佳*

第9回国際日本学コンソーシアム日本文化部会①は、文教育学部1号館1階大会議室にて15日の午後に開催し、報告者は世川祐多さん、鄧宜欣さん、和田麻子さん、クレメン・セニツァさんの4人だった。以下、各報告内容や質疑応答について概略をまとめる。なお紙面の都合上、すべての内容を記載できなかったことをご了承ください。

1. 世川祐多さん（パリ・ディドロ大学）

「近世武家社会の養子から考える女性史」

世川さんはまず、桑名藩の『天明由緒』にみられる養子に関する記録の分析から、武家の養子における家格との関連性を、また会津藩の『家世実紀』の記録から、養子に関わる規定や対応の変遷等を分析された。日本の養子について根本から再検討していくには女性も対象とすることが必要であり、フランスの家族史研究の視点を持つことが重要だと主張された。また、今後は日本の武家社会で女性が記した史料を扱うことで、養子と女性の地位について体系的な研究の実現を目指す、とされた。

会場からは、史料中にみられた女性に関わる（女性が養子をとった）具体的な例について関心が寄せられた。

2. 鄧宜欣さん（台湾大学）

「元禄享保期の経済思想—徂徠と春台の思想を中心に—」

鄧さんは、元禄から享保期の経世思想の中心として、儒学者・荻生徂徠の「武士土着論」とその弟子・太宰春台の「藩専売論」といった二つの経世策を比較し、両者が異なる論理を持った原因を分析された。両者の経世策の相違点は貨幣・商品経済の現状に対する見方の違いと、政策の規模の違いにあり、それらは二人が生きた時代背景・人生経験の違いと、古文辞学における人間認識の違いによって生じたものだと考察された。そのなかで、人間認識の違いによって道の定義に違いが生じた、という点をとくに重要視された。

会場からは、二人の経世策に違いが生じた理由について質問があり、身分（出自）の違いも考察の対象に成り得るとされた。また、二人の経世思想が後の社会にどのような影響を与えたのかについても関心が寄せられた。

3. 和田麻子さん（お茶の水女子大学）

「18世紀中期における御用木伐出と地域社会—武蔵国秩父郡大滝を中心に—」

和田さんは、武蔵国秩父郡大滝の事例を対象に、18世紀中期における幕府の御用木伐出の分析から、公権力の介入が地域社会をどのように変容させたのかを考察された。古大滝村・新大滝村と中津川村の間で、享保期に決着した稼山をめぐる境

*お茶の水女子大学大学院院生

界争論が宝暦期に再燃した背景には、御用木伐出による幕府役人の見分が影響しており、山林用益を囲い込むために御林内に境界を設けるという動向に繋がった、と指摘された。

また、この研究報告と今回の「グローバル化」というテーマとの関連について質問が出たが、個別研究を重ねることで全体像を知ることができ、日本国内はもとより国外の諸地域との比較も可能だという見解を述べられた。

4. クレメン・セニツァさん(リュブリャナ大学)

“Some thoughts on Western academic representations of the Great Japanese Empire”
「大日本帝国をめぐる西欧の学者による表象についての考察」

セニツァさんは、大日本帝国に対する研究のなかで、西欧の学者と日本の学者の間に生じる相違点や問題点について、また、日本の帝国主義の性格や大日本帝国の出発点の設定などについて見解を述べられた。それを受けて会場では、「帝国」と「empire」、「植民地」と「colony」といった表現には、日本と西欧では認識や感覚にズレが生じている、といった問題を中心に、活発な意見交換が行われた。

以上、4人の方々の報告によって、各々の研究テーマを発端とし、日本の歴史学について多様な視点から考える機会にめぐまれた部会となった。